「部下かばい改ざん」

瀬尾医師 「公には話せない」

医局の不文律に従う

心臓外科の分野で日本を代表する大学病院に28日、異例の強制捜査のメスが入った。東京女子医大病院で昨年3月、群馬県高崎市の平柳明香さん（当時12歳）が心臓手術によって亡くなって1年3カ月。なぜ、子供の命が失われたのか。ミスはどのように隠されたのか。遺族の怒りと悲しみに報いるための真相究明が、ようやく始まった。【医療問題取材班】

東京女子医大医師2人逮捕

「（部下をかばう）医局の不文律に従ってしまった」。警視庁に証拠隠滅容疑で逮捕された東京女子医大講師、瀬尾和宏容疑者(46)は4回にわたって毎日新聞の取材に応じ、カルテ改ざんのいきさつを明かした。

——改ざん方法は。

◆ICU（集中治療室）の看護記録に記された（患者の）瞳孔の大きさを看護師に頼んで書き直してもらった。脳障害が起きた時に行うクーリング（低体温療法）の記載があった人工心肺記録も技士と作り直した。

——ミスによる脳障害を隠すためか。

◆そうです。

——何のために。

◆ミスした後輩をかばうためと言えば、証拠隠滅罪に問われる可能性もある。自分のためにしたことではないが、言えない。

——過去には。

◆私はしていない。医局で見聞きした（別の）ケースは警察で話した。

——主任教授は。

◆手術後、私が状況を説明した。「カルテを持ってこい」と言われ、改ざんしたものを見せたが、何も言われなかった。

東京女子医大病院の林院長のコメントを配る病院職員＝28日正午、塩入正夫写す

——組織的な問題があったのでは。

◆部下が手術で大きなミスをすれば、私のような講師クラスがかばう。そんな医局の不文律に従ってしまった。医局は主任教授の考えで動き病院は医局の単なる集合体だ。

——公的な場で真相を話す気はないか。

◆私が話せば女子医大は（牛肉偽装事件で会社解散に追い込まれた）雪印食品になってしまう。

——患者や家族に対してどう思うか。

◆本当に申し訳ない。忘れたことはない。

——言いたいことは。

◆手術の時、頼んだものとは違う人工心肺装置が使われた。（脳障害につながる）トラブルが起きる装置を勝手に導入した者の責任はどうなるのか。

◇

業務上過失致死容疑で逮捕された医師の佐藤一樹容疑者(38)は関係者を通じて「申し訳ない」とミスを認めていた。幼い子供を死なせた自分を責め続けているという。

手術後、明香さんに重い脳障害が起きていたが、瀬尾容疑者はそれを隠して両親に手術経過を説明していた。横にいた佐藤容疑者は「これはまずいな」と思ったという。

事故では、人工心肺装置にトラブルがあった場合の対処方法を知らなかったことが問題になった。他大学では防止策を取っていることを知り、「そういう工夫があるとは」と驚いたという。

「驚きと無念」

院長がコメント

東京女子医大病院は28日、「驚きと無念の思いに駆られている。医療不信をきたす結果となり、まことに申し訳ございません。今後徹底した過去の清算と、時代に相応した安全で実りある医療を担う新しい病院組織への再生に向け、一層の努力をしていきたい」との林直諒院長のコメントを発表した。同病院外来には通常通り大勢の患者が訪れた。外科手術を受けるという埼玉県所沢市の無職男性(65)は「ここでしかできない手術なので、これを機によい医療に徹してくれればと思う」と注文した。

「明香は帰ってこない」 平柳さん

平柳明香さん

平柳明香さんの父利明さん(51)は28日、前橋市の群馬県庁で記者会見し、今回の逮捕について「私共の悲しみが癒えることはないが、医療事故という難しい事件に対して、捜査関係者の努力で今日、一つの区切りが出され、感謝したい」と語った。

平柳さんは01年3月に明香さんの手術直後からミスを疑い、同病院に事実関係を明らかにするよう再三求め、今年1月には警視庁に告訴した。

母むつ美さん(42)は「まさか死ぬことはないといちばん強く思っていたのは明香だったはず。逮捕されても明香は帰ってきません」と話した。

いきなり手品…… 検査で大麻発見

成田・容疑者逮捕

東京税関成田支署と新東京空港署は28日、大麻を密輸入しようとした関税法、大麻取締法違反の疑いで、埼玉県八潮市南後谷の米国籍の手品師、テランス・デイビッド・シェアード容疑者(39)を現行犯逮捕し、送検したと発表した。

調べでは、シェアード容疑者は12日朝、バンコクから成田空港に入国した際、大麻1㌔（末端価格800万円相当）を、大道芸に使うプラスチック製ボール（直径8㌢）2個の中などに隠し、持ち込もうとした疑い。所持品検査で手荷物を開けるよう求めると、突然、手品を始めたため、不審に思った検査官が厳重検査して見つけた。

技士軽視、ずさん医療体制

解説 東京女子医大病院の心臓手術ミスによる女児死亡事故で、警視庁が異例の医師逮捕に踏み切った。背景には心臓手術の生命線である人工心肺装置の操作方法を手術に立ち会った医師全員が知らなかった重大性と、執刀医らが看護師らにカルテなどの改ざんを指示して組織ぐるみで事故を隠ぺいした悪質さがある。事故隠しを放置してきた病院幹部や経営陣の責任、病院の体質も問われている。

事故を起こした同病院の循環器小児外科では、心臓手術に3種類の人工心肺装置を使い分けていたが、手術の責任者だった瀬尾容疑者は、どの種類の装置を使っていたか把握していなかった。

さらに、同科では、技士を軽視する風潮から、人工心肺装置の操作担当者は専門知識を持った技士ではなく、医師が行うのが慣例となっていた。しかし事故当時、装置を直接操作していた佐藤容疑者も含め、手術に立ち会った医師5人はだれも装置がトラブルを起こした際の対処方法を知らなかったことが分かり、心臓手術を看板としている同大の医療体制のずさんさが浮かび上がった。

手術には多くの関係者が立ち会い、事故を認識していた。大学の経営陣には内部からミスを告発する文書が事故直後に寄せられた。しかし、瀬尾容疑者らが同僚を巻き込んでミスを隠し、事故を疑った明香さんの両親にうそをつき続けた行為を大学はチェックできなかった。医師の権威を守ろうとし、過ちを認めない同大学の閉鎖的体質が改めて示された。

一罰百戒の意味

近藤誠・慶応大放射線科講師の話 日本の医療界は、ミスなど質の低い医療をした医師に対する処分が不十分だ。警察が乗り出すのもやむを得ない。カルテの改ざんはこれまで軽視され、医療過誤訴訟では、改ざんが認定されても被告の病院側が勝訴する例があった。改ざんは本来、重く罰するべきで、今回は一罰百戒の意味があると思う。

病院の体質に問題

医事評論家の水野肇さんの話 医療ミスで医師が逮捕されるのは異例で、通常は在宅起訴だが、この事件では当然だ。カルテの改ざんをしているし、他にも学内で事故の一歩手前の例を集めた報告文書を廃棄していたなど、証拠隠滅の恐れがあるからだ。女児が亡くなった心臓手術では、担当の5人の医師の中に、人工心肺を正しく操作できる医師はいなかった。準備不足で、手術を軽視していたのではないか。女子医大は病院の体質に問題がある。

女子医大小児心臓手術事故

2医師逮捕

2002年6月28日　毎日新聞夕刊社会面